

昭和三十三年における国語学界の展望

国語史(中世以降)

池上 禎 造

三十二年分(本誌第三十六輯拙稿)と大体同じ方針にしたがった。前半期の担当者で打合せなかつたので、やや広いめにとつた点のあることをおことわりする。

一 中 世

前年にくらべて中世関係のものは増してゐるが、それが後半期に偏することは変りない。さういふところで「色葉字類抄の一語彙群」(相坂一成、国語学33)や「五韻次第考」(森岡健二、東京女子大学論集九—)などは珍しい。前者はその三巻本の疊字門所収の字音語のうち「……名」の形の注をもつ一群の性質を考へたもので、本書の編纂過程を探る手掛りを与へる発見であることは勿論、さらに語彙論への何かにもなると思はれる。後者は五十音図の祖図推定に注目されてきた本書を八つの部分に分けて他文献との関係をしらべ、鎌倉後期以後に類聚編集されたものとす

る。
以下は作品を中心にとめるのが便利なので、流伝のテキストなどの時代の降るものも一つに扱ふ。「平家物語語り本の詞章に

ついて」(宮坂和江、国語と国文学三)は一方流を中心に、その本文が庶民相手であるため、説明的で整ひ・係結び・繰返し・敬語などの増すことを述べたもので、近世にわたる。「平家物語の文法」(山田俊雄、日本文法講座4解釈文法)は解釈文法といふこと自体を問題にして「古典解釈に当つての文法の位置や意義を平家物語の場合を例にとつて考へようとする意図のものである。

同冊中には「謡曲の文法」(福島邦道)や「狂言の文法」(寿岳章子)もあるが、割りあての頁数が少なくて書きにくいらしい。後者はわざと虎寛本を中心にしてある。「謡曲詞章小考」(森野宗明、国語六一三四合)は、言語の人物による使ひわけについて「参す」などをとりあげてあるが、「讃岐典侍日記の口語について」(未定稿5)や「院政期における宮廷女流社会での待遇表現について」(国語学会口頭発表・東京・十一月)と一連をなす。「謡本の表記について」(下)(和田実、国文論叢7)は前回につづき、促音以下の表記法を現行諸流の本について検討してある。「世阿彌の禪的教養」(香西精、文学十二)は「特にその用語を中

心に」といふ副題の示すやうに、その伝書中の若干の語彙についての考証など教へられる所が多い。「狂言詞集」(古川久、東京女子大学日本文学10)はマーメまでであるが、終りも近づくにつれ、単行を鶴首する者は少くないだらう。

キリシタン関係はなかなか多かつた。まづ「キリシタン文学」

(森田武、岩波講座日本文学史5)は、「文学」とはいへ筆者が筆者だけに、われわれにとつてはありがたい総論といへよう。これに配するに「キリシタン資料刊行本目録・キリシタン語学関係論文目録」(福島邦道、未定稿5)をもつてすることができる。基礎的なものでは前年にひきつづき、「きりしたん版文字放」四

一六(富永牧太)「きりしたん版国字本の印行について」二一四(新井トシ)がいづれもビブリヤ10112に連載されてをり、「天草版ラポ日辞書の表記」(川上葵、国学院雑誌二)がある。さら

に進んで、「コリヤード懺悔録の構成について」(大塚光信、尾道短期大学研究紀要7)は、従来相当混乱があるとせられた本書を大体整理されたものと見る。この筆者の同紀要次集(8)——外には一九五九とあるが奥付が三三年十二月——の「羅西日辞書の日本語」(一)はコリヤードの辞書の日本語をABC順に並べかへたのでまだBまでであるが、周到な用意の下に行はれてゐて、完成単行が待たれる。さきの羅葡日辞書にもこれが必要だが、各自が手控へを作るよりも、かういふ仕事をそ共同作成が可能のはずである。でない、たとへば「羅葡日辞典の日本語におけるie交代」(河野亮、音声学会会報96)や同じく口頭発表(言語学レシユメは言語研究33、国語学会 京都)などのやうに、どちらつか

ずで、その労を生かしくいこともあらう。「天草版平家物語の敬語表現」(清瀬良一、国文学放19)は同書地の文の敬語について、原文平家の巻八までにあたる部分とそれより後とで差が認められるといふ。「天草本平家物語の形容動詞について」(麻生朝道、佐賀大学文学紀要1)は、その語幹の名詞用法をもつものが少ないことを述べてゐる。

「中世における辞書の二三について」(川瀬一馬、青山学院女子短期大学紀要10)は色葉和難集その他のこともあるが、饅頭屋本節用集に異版のあることの報告が注意される。あたかも「易林本節用集について」(島居清、ビブリヤ11)において天理図書館所蔵の原刻本が、流布本や無刊記本とそれぞれ相当の出入があるのを表示してあつて、われわれは節用集などの使用について考へさされるのである。「候体の抄物二種」(馬淵和夫、国語六—三四合)は、宝徳書写の明範口伝悉曇字記抄第一と永正の奥書をもつ文政写本の悉曇初心問答鈔との紹介で三頁にすぎないが、抄物といへばナリカゾかの体を考へたのに対し候体をたてる点に意味がある。「抄物における所謂推量の助動詞」(中出悳、愛知大学文学論叢16)は穂久邇文庫本大学抄と中庸抄によつて述べたものの。わたくしは、資料をひろくあさつて歩くだけが学問だとは思はず、一つの本に沈潜して「抄物における」といふやうに一般的な言ひ方ができる場合も認めるのであるが、この場合はどうも該当しないやうである。

説話文学は扱ひにくいのか、この年も、見るべきものがない。さすがに今昔物語については数篇もあり、「古本説話集総索引」

(一) (広島大学国語学研究室) も出るといふ機運にあるが中世のものではなかった。ただ資料の紹介や文献学的研究では縁起や絵巻のあることを注意したい。「西行物語絵巻・当麻曼陀羅縁起」(日本絵巻物全集Ⅻ) や応永九年の「善光寺如来本懐」(慶応義塾大学国文学研究会編国文学論叢2) などの翻刻は資料として使へよう。「葦山竹林寺縁起」(友久武文、中世文芸13) は短い真名本だが時代はわからない。「北野天神縁起の成立について」(おおの・いさお、史学雑誌九) 「春日権現験記の成立」(近藤喜博、日本歴史十二) 「粉河寺縁起絵巻絵詞の研究」(片野達郎、文芸研究28) など目についたが、往々用語や文体に言及することもあり、逆にこちら側から資料としても考へてよいと思ふのである。

さて、資料的にくゞれない一般的なもので「中世言語文化の素描」(山田俊雄、日本文化史講座4) は、始めに言語文化といふことについての論があつて、いはば、下部構造でない側のものを取上げようとした試みである。「室町時代の、が」(寿岳章子、国語国文七) は、「の・が」自体に感情価値を認める立場で、その用法を詳細に論じてある。「中世の敬讓法」(権田定樹、国語国文十一) は「いたす」「存ずる」の語性を「申す」との関連において史的にたどつたもの。前者は抄物が中心に、後者は狂言が中心になつてゐるが、題の通りの射程をもつものである。「鬼面—民俗語彙『ヒトクメ』について—」(佐竹昭広、学習院大学文学部研究年報5) は飛騨高山で今「人見知り」をあらはすヒトクメが、十四世紀の「山王絵詞」に幼児の遊戯の名として見えることにつき、両者の意味論的つながりをヒトコクメといふ形を考

へて解いたもの。一語の考証の問題でなく、その手つづきが心にくい。「手ぐすね引く」考(橋本元二郎、人文研究二) は保元物語に初見のこの表現について弓道用語を詳しく考へようとしたもので、室町時代にできたものであるから保元物語のその部分は追補であるといふ。「あらない」はあらない(橋本四郎、女子大国文9) は「おあむ物語」の有名なこの一例について、語法的にあり得ないことを述べたもの。他のテキストにこの個所がさうなつてゐないことを報告する方が重んぜられる習慣であるが、刊本のその部分が誤りに基づくことまでを証明するのはなかなかである。本書についてはそちら側の研究の余地もあるが、多くの場合は永久に不明に終るであらう。およそあるものの非存在の証明はさう容易ではない。したがつて、ここにとられた態度は、資料主義者といへども認めねばならない。本稿の結論は別に珍しいことでないが、この展望で資料的なものができるだけ網羅するのに対しさうでない短篇は割愛することもあるので、一頁半の埋草ともいふべき本稿に托して、ことに国語史においては資料といふものの意義は、もつともつと考へられねばならないことを言ひたいのである。

二 近 世

この節で取上げるべきものは大変少なく、かつ散発的である。「近松の文法」(真下三郎、日本文法講座4) は解釈文法の他の諸篇と違つて、対象を世話物乃至時代物世話場の会話に限り、元祿享保頃の京阪語法を志向したものであるから、安んじてこの位

置におくことができる。「おくのほそ道総索引」(原岡秀人、佐賀竜谷学園)は岩波文庫本によるものである。「西鶴漢字の体系的処理に関する一試案」(杉本つとむ、国文学研究17)は同1112輯につづくものとして期待されるが、「江戸前期上方の一言語」(竹内彰、群馬大学語学と文学2)とともに未見であるのを遺憾とする。

「幕末の大阪弁に現れた女性専用の終助詞『でえ』について」(前田勇、学大国文2)は一荷堂半水の「ことわざ臍の宿替」と「穴さがし心の内そと」を材料として「でえ」の用法を調べ、終形についた「ぢや」の変容と解する。

ここで、朝鮮人の手になつた唯一の日本語辞書「倭語類解」(浜田敦解説、国語及漢字索引付)が京都で複製せられたことを特筆したい。十七世紀末か十八世紀初に成つたらしく、わが雨森芳洲に質したとあるから、資料としての信頼性も相当に評価できよう。珍しい語彙について他の文献をあたつてみるのも楽しいが、いづれ少し詳しい研究も出るはずである。朝鮮資料を使つたものに「客館雑纂集による国語音の研究」(大友信一、文芸研究29)がある。享保四年(一七一九)来朝の通信使との唱和を尾張の儒者木下蘭皐が編した本書には諺文といろはとの対音表がある由でそれを手がかりとして、母音オ・ウや、ズとハ行子音の音価など四項について、当時の尾張地方の発音を推定しようとした意欲的な論文である。結果も面白いが、本書を見ることのできなかつたわたくしは、その対音表の成立について今すこし説明がほしく思ふ。同類の桑韓唱和埤篋集(右の稿では第五六字転倒)によれば蘭皐が書記耕牧に諺文について尋ねた答の条に「別書諺文示余、

載客館雑纂集」といふ注が見える。多分かやうな筋のものかと思ふが、仮名と諺文との対音がなまなましく当時の当処でのものと断じ得るのか、因襲的な要素を含まないかといふ点どうであらう。今一つの外国資料は『欧弗亜旅行記』瑞日語彙(吉町義雄文学研究57)である。十八世紀末に刊行されたツンベルク旅行記第三巻には日本語についての記述があり、千五百近くの語彙をあげるが、その翻刻である。これについては既に本誌21輯に、杉本つとむ氏の稿があるから参照ありたい。

「江戸初期東国語の一考察」(蜂谷清人、文芸研究29)は雑兵物語中のゴザル・ゴザナイ・申スなどについて調べたもの、「江戸末期の日本語素描」(杉本つとむ、国文学研究18)はBrownのcolloquial Japanese 1863を材料にしたものである。最後に、「近代日本語の語源」(斎藤静、言語研究33)は、幕末におけるオランダ語からの翻訳借用語について考証するにあつたての用意や方法を述べたもので、終りに少し具体例もあがつてはゐるが、それには例へば同誌2の「日本語に及ぼした和蘭語の影響について」などを参照すべく、本稿はその総論的な位置を占める。資料の量に圧倒されるにつけても、かういふ用意の翻訳語辞典ができるのは何時かと待たれる。

三 現 代

ここに属すべきものもまた多くない。しかし、まづ総論といふべき「明治以後の日本語」(松村明、講座現代国語学Ⅱ)は、前年にみづから積まれた諸成果を越えて新しい研究をも交へつつ手

際よくまとめられてゐて、教へられる処も少なくない。文献にもとづいたものではないけれども「東京語の特色」(金田一春彦、言語と文芸1)をこゝらであげよう。語法・音韻・アクセントなどについて特徴的な項目を設定して全国各地の二十氏に問ひ合せ果して東京語の特徴といへるかを検した上で得られた結果といふ。前年に述べたやうに、共時的研究で、しかも文献によらないものは国語史の成果としてあげにくいだらうが、一時点の実態調査は史的研究にも重要な意味をもつから言及した。調査といへば「東京都内の中学生のザ行発音調査」(岡崎有郷、文学論藻10)「東京都内の中学生のガ行鼻音調査」(同、音声学会々報96)「東京アクセントの近況」(清水郁子、音声学会々報97)や、近畿方言の例による「アクセント変化過程の実態」(樺垣実、帝塚山学院短期大学研究年報6)などが関係誌から見出されたが、教育や心理方面にもあるかも知れない。

「新聞における敬語の研究」(田中玲子、東京女子大学日本文学10)は、明治初期、二十年頃・大正初期・大正末から昭和初期・昭和十年頃の五時点をとリ、敬語使用の消長を概観したものである。また共時資料になるが、「敬語法における女性語の動向について」(大橋千代子、文学論藻12)は中年婦人と女子高校生とに対する調査である。前年につゞき「総合雑誌の用語」(国立国語研究所)は後篇が出て完結した。かういふ語彙調査が大学の演習などでも試みられるやうになつて、その一部の報告「週刊雑誌の語彙」(佐藤茂、福井大学国語国文学8)なんかもある。ある期間の週刊朝日についてのアースの報告で、直には使へないだらうが、古文

献の処理と並んで、かういふ操作を通じての頭の錬磨といふ教育的意義を高く評価したい。なほ、年末から刊行の始まつた「福沢諭吉全集」(岩波書店)は第一巻に華英通語と西洋事情ををさめてゐる。「明治初期国語教科書の性格」(山根安太郎、国文学攷20)や「法令用語の常識」(林修三、日本評論新社)も資料たるを失はない。

四 文語と文体

「徒然草の文法」(白石大二、日本文法講座4)は侍りと候フとか、対象語とか、助詞ニの欠如といつたふうに重点的に問題が取上げてあるが、この侍りについては、同じく二月に「つれづれ草の『侍り』をめぐつて」(森重敏、女子大国文8)といふ長篇が出た。徒然草を契機として問題を展開するところにこの筆者独特の態度があるが、他の諸文献の侍りの用例を九頁にわたり六号追込みであげてあるのは壯観である。「公」と「私」が敬語を規定するといふ論が中心であるが、その哲学になじめず、或いは江戸の文語文献まで一しよに挙げる立場に抵抗を感じる人も、得る所は右の用例にとどまらないだらう。連歌関係で「否定敬語表情の研究」(丸山嘉信、徳島大学学芸紀要7)があつて、「もなし」について意味論的な考察が見える。

「西鶴の文法」(島田勇雄、日本文法講座4)はその文体的特徴を十項余りにしほつて概説したもの。「西鶴と団水」(神堀貞子、関西大学国文学22)は、その慣用語と慣用語について両者の作品を比べたものであるが、「あられなし」とか「みなになす」とかい

つた語彙についての個人の傾向をさぐるのはむづかしいことと思はれる。「西鶴の美文意識」(堀章男、武庫川学院女子大学紀要6)では、先行作品をいかに素材として取返むかといったやうな角度からの調査があるが、題が立派であるだけに、方法の困難が目立つ。「芭蕉の文法」(森修、日本文法講座4)はまづ連句文法について一言した後、発句文法について、破格や切字句切れに最も頁をあて、表現と文法といふ結びをつける。

「言文一致文の歴史と特色」(山本正秀、続日本文法講座3)はこの筆者の独壇場の観ある旧稿(明治大正文学研究11)と同じ組織で六期に分けて説くが、量が一倍半に増してゐるだけに実例も豊富で、以後はこれがこの研究のよりどころにならう。「山下清の文章」(寿岳章子・樺島忠夫、西京大学国語研究室)は昭和二十年代の後半数年分の日記原本を資料として、その表記法や使用語彙と、文章の諸特徴とを調査したものである。山下清の言語生活といふ章が前置きになり、その文章能力は智能指数に比して案外高いが、むらがあるといふ結びに到る。索引を作り統計的処理を重ねた調査が七十余頁に圧縮されてゐて、注目すべき成果といへる。

さて、全体にわたるものとして、「文章の変遷」(佐藤喜代治講座現代国語学Ⅰ)があげられる。文章の発達・かなの発達・口語文の発達・言文一致の四章に分けて、わが国の文章の発展のあとをたどつてあるが、従来から案外かういふものに乏しいので便利であるのみならず、漢文系のものに然るべき位置が与へられたのもわが意を得たことであつた。一方、「古典の文章研究書目並

びに解題(上代)」「(西尾光雄、文学十二)」「近代文学とことば」(関係文獻目録) (柳生四郎、文学七)が編まれたのはありがたいが、それらを見ると、文体とか文章とかの語義が多岐なためもあつて、その文献の数のおびただしいにおどろく。それだけに上代につづいて以下のものも出してほしい。大体、この領域は近年とみに盛んなのであつて、この書目も雑誌文学が「近代文学とことば」(七・九)「古典文学とことば」(十・十二)とそれぞれ二号にわたる特集を行つたについての産物なのである。これらの号の諸篇に一々言及の余裕はないが、「文体における中世の成立」(永積安明、十)は平家物語と方丈記を中心にし、「中世における文体の崩壊の問題」(亀井孝、十二)は徒然草が頂点になつてゐるが、ともに勝義の「文体」の研究の典型と思はれる。文学を志向するこれらの特集に対し続日本文法講座の文章編はもつと文法的といはうか。これも一々紹介の暇がないが、「口語文と文語文」(根来司)では、徒然草と雨月物語を代表に言文二途時代の文語の研究が意図されてゐる。さうしてこの面での野心的な成果として「近世における文語の位置」(橋本四郎、京都女子大学文学部紀要17)を推さう。これにはなほ「庶民のなかの思想家の文章」(三枝博音、文学十二)に見られるやうな面の考慮もいるだらう。明治の普通文といはれるものの先縦はおそらく江戸時代に求むべきだと思ふのであり、つまり江戸の普通文といふ問題になると思ふ。

この年はこのために一節をたてるほどのものが見られる。「歌合の判に於ける方法意識」(鈴木一彦、文学論藻10)は同じく「和歌注釈」におけるもの(山梨大学学芸学部研究報告9)と一連の中世歌学を通して国語への態度を見ようとしたものである。

江戸時代では、真阿宗淵の百回忌にあたることから始めよう。

残存の版木による著書の新刷も少々行はれたが、また記念論文集「天台宗僧宗淵の研究」(京都百華苑)所収十数篇の論文は種々の角度からの考察で便利である。年譜・著作開版書目解題・旧蔵写本現存目録もある。昭和十五年の暮に京都北野神社でその著書蔵書の展覧が行はれたが時間が足りず飽きたりなかつた思ひを今はらすことができた。その時きく暇のなかつた猪熊信男氏の講演筆記まで添うてゐる。ところで、ここに直接関係あるものとして「山家本法華経裏書所引の古辞書」(山田忠雄)がある。二十点近くの引用辞書を考証し、その使用態度が、傍証としてといふ進んだものであつたことをのべ、音韻・字形に対する関心は校査をこえたかも知れないといふ。なほ類聚名義抄の項で、宗淵引用のものが観智院本と全くは同じではないものがある由の言及があるが、関西大学現蔵、生田耕一氏旧蔵の本(西念寺蓮成院混合本——国語国文別刊高山寺本類聚名義抄解説五頁)には竹田房の蔵印があることが気付かれたので解決の可能性が多い。(近刊予定関西大学国文学島田退蔵先生古稀記念号渡辺実氏稿参照)

「雅言通載について」(土井忠生、国語国文十一)は、榎並隆輝あらはす本書が流布少なく解題の類にも誤が多いので、筆者架蔵の本によつて解説考証し、城戸千橋が抄出して刊本もある雅言通

載抄との関係などにも及ぶ綿密な論文である。「賀茂真淵の仮名づかい観」(江湖山恆明、お茶の水女子大 国文9)は音韻の標識としての仮名遣であることを述べたもの、「活語断続譜」の成立は果して享和三年六月か(古田東朝、解釈112合)は従来認められるこの日付を少し降るべきことについての提案である。「妙玄尼公について」(三木幸信、京都女子大学紀要16)は、妙玄寺初代のこの尼公について本山から調査を托された義門の行動を中心に述べたもので、「活語余論」第四巻からの翻刻(女子大 国文8910)といひ、義門研究にたゆみがない。かういふもとは先学の展覧記をものする人もできる。——「富士谷成章」(井上熙子・倉盛正子、同11)

これが発展し組織化すると昭和女子大の遺蹟巡礼になり、そこから生れた「近代文学研究叢書」はこの年、八、九、十の三巻を出し、イーストレキとか四迷の名も見える。「日本文典に及ぼした洋文典の影響」(古田東朝、文芸と思想16)は勿論明治初期のものだが、同類のテーマの短篇が氏には多い。「美妙前の Accent 辞典」(佐藤良雄、音声学会会報98)は、言語取調所などで全語彙にアクセントをつける問題もあつた点から、日本大辞書があの形をとるのが偶然ではないことを述べる。

六 全時代にわたるものその他

「日本語の変化」(渡辺実、コトバの科学2)は、これと対をなす「西欧語の変化」(中平解)が専ら語のことに終始するのに対して、問題史的な国語史をねらふものである。二〇頁にこれらを

盛るための無理や、荒けつりの嫌はあらうが、問題の設定のしかた、現象の解釈などなかなか示唆的である。音便や敬語などそれぞれ独自の論文になり得よう。「古代語から近代語へ」(山田巖講座現代国語学)は、活用形の変遷を中心としてといふ副題があるやうに、問題をしばつて専ら現象を記述したもので、前者とよい対照をなす。「近代日本語の成立過程(1)」(杉本つとむ、日本文学八)は言語事実よりも外史的な要素をも多く盛りこんだもので、桜楓社予告単行本名に付く「ことばと生活」といふ副題がそのねらひを示してゐる。かうなると、この展望には別項があるはずだが、同名の「言語生活の歴史」(岩淵悦太郎、講座現代国語学) (松村明、国語教育のための国語講座7)二篇をもあげたくなる。その解説はあちらにゆづるが、だんだん扱はれる事項が複雑になつていつて、結局はこれがラングの歴史とも一面ではつながらざることを期待するのである。

言語生活ではしばしば文字のことが問題になるが、文字の歴史といへばさういふ立体的な考察がしたいものとわたくしは思つてゐる。現状でこれを一般に求めるのは無理だから、「表記法の変遷」(山内育男、続日本文法講座2)も、珍しい標本を並べられた労を謝しておかう。「カツコの用法」(宇野義方、立教大学日本文学1)になると表現の内容的なものに連るから今後面白い結果も期待できよう。語彙は言語の変遷と生活とを結びつけるものであるが、「蛭蠨考」(長尾勇、国語学32)はいつもながら周到な資料の蒐集から手がたい論証をすすめ、單純に境界論や周圍論に割切れないことにならぶ。「『もの』と『道理』」(佐藤茂、福井大学学

芸部紀要8)は、文語語彙と口語語彙との一つのことからとしてといふ副題があるが、富士谷の俚言解において「道理な」といふ形があるのが問題の山である。果してここに置いてよいものか迷つた。次に、これも場所が適當でないかも知れぬが、東京における秋の公開講演で配布された「漢和辞典ノ成立」(山田忠雄)は、謄写に代へるとあるが活字印刷三六頁の堂々たる小冊子、しかも四五〇点近くの辞書の書誌の表であつて、参会者を感じさせた。

「条件表現の変遷」(阪倉篤義、国語学33)は、古代語で確定条件表現に用ゐられた「已然形+ば」が近代に仮定条件に移るといはれる事実を出発点とし、条件法の中を確定、仮定それぞれ三分して、その一つ一つがどう動いてゆくかを細かに検討して秩序を与へたもの。「用言+ならば」「用言+たらば」の中世における交渉などが一つの山になる。条件法の細分されたものの判定には微妙な点もあり得ようが、くまなき資料の援用といひ、現象の推移に対する明快な解釈といひ、まさに史的研究の典型と認められる。「敬語」(塚原鉄雄、コトバの科学2)の中には、その変遷や歴史の項があつて、古代は心理的契機の社会的契機に対する優越、中世はその逆転、近代は「第二次的敬語」の生長とでもいつた形の概括が見られる。「サ変動詞「す・する」の補助的用法」(西尾光雄、東京都立夫人文学報17)や「疊語について」(黒沢修、山形大学教育学部国語研究10)もここにおかう。

「国語における音節の脱落について」(岸田武夫、京都学芸大学学報A12)は、今回は連音中部末部におけるものである。母音音節と頭子音をもつ音節とにわけ、それぞれ脱落する母音ごと

に、古代から近世までの多数の文証を例示して、脱落の条件を考へようとしたもの。いやむしろ、連接母音の広狭と脱落との関係を見たといはう。個々の脱落資料の認定は人により相当なひらきができる点と、況時論の限界と可能性など考へさせられる。「平安・院政時代における複合名詞のアクセント法則」(桜井茂治、国語学33)の筆者によつて「助詞『の』のアクセント」(国学院雑誌5)の推移の傾向も見出された。中世の間に行はれた変動で漢語につくと少しちがつてくる。なほ「声明の『読みくせ』」(寛五百里、岐阜大学研究報告7)や「後陽成天皇庭訓の百人一首のよみくせ」(小高敏郎、白楊社国語研究29)が見られるが、後者は慶長十五年口授のものからの転写本(業師寺蔵)を紹介したものである。よみくせには、音韻資料の問題と別に、かういふことを考へ教育する言語生活が調べられねばならない。

「尼門跡の言語環境について」(井之口有一、堀井令以知、中井和子、西京大学人文10)は前年からの尼門跡用語研究の一つとして、京都大聖寺の機構・年中行事・尼僧教育といった外的状況を記録したもの、「尼門跡使用の『シャル』『マシャル』『であらシャル』について」(井之口有一、国語学32)はそこでの特徴的な言ひ方についての用法の報告で、近世上方語とつながる。「上方落語の歴史」(前田勇、大阪杉本書店)は、本書の一半を占める「上方落語のオチとその可笑味」「落語という語について」などとともにこの方面の一つの収穫と言へる。「話芸としての漫才の成立事情」(前田勇、学大国文1)もあることを附記する。かう述べてくれば、「平家物語享受理解の史的展開」(小松茂人、文芸

研究3)や、ことにもつと具体的な「近世小説の作者と読者」に焦点をしばつた文学五月号などもあげたくなり、「西欧化日本の研究」(三枝博音、中央公論社)にいたる。人名のことも一二論ぜられたが、「日本人の名まえ」(渡辺三男、北辰堂)は一般向のものとはいへ、他にこの程度ままとまつた通史はないだらう。この方面ももつと進んでよいと思ふのであへて言及する。

前年にくらべて文語文体の項と学史の項との増加が目立つほか大勢は変りない。紀要類の増加のほかに、この年は講座や営利的雑誌に動員される人が多かつた。そのため自分の研究が遅れるといふ見方もあるが、優秀な人はそれを契機によいものを生み出してゐる。危いのは四十以上のわれわれかも知れない。近世や現代が少ないのは前回に述べたやうな原因によらうが、それをかこつよりも自らむちうたれる思ひである。どの時代が専攻といふくらりかたは、わたくしは迷惑であるけれども。

—京都大学教授—